



No.12

2026年9月14日

Newsletter

日本遺伝性腫瘍学会 / The Japanese Society for Hereditary Tumors

目次

学術集会開催報告

第32回学術集会を終えて	n1
学術集会トピック&感想	n1

Topics

第6回トラベルグラント賞	n4
--------------------	----

開催報告

第4回遺伝性腫瘍アドバンスセミナー報告	n5
---------------------------	----

活動報告

Cowden 症候群部会	n5
新委員会設立のお知らせ	n6

お知らせ

第33回日本遺伝性腫瘍学会学術集会 会告	n6
第29回遺伝性腫瘍セミナー	n6
Lynch Syndrome Forum 2026	n7
学会ホームページのご紹介	n7
編集後記	n8

学術集会開催報告

❖第32回学術集会を終えて

第32回日本遺伝性腫瘍学会学術集会

会長 井本 逸勢

愛知県がんセンター 研究所長

去る2026年6月12日、13日の両日、第32回日本遺伝性腫瘍学会学術集会を名古屋駅前のウインクあいちにて開催させていただきました。今回の学術集会は初めての中部・東海地域での開催であり、準備委員、プログラム委員の先生方と議論を重ねながら、約1年にわたり準備を進めてまいりました。おかげさまで現地での開催を大過なく終えることができ、安堵しております。これもひとえに会員の皆さまのご協力、ご支援、ご指導の賜物と存じます。心より御礼申し上げます。

個人のゲノム情報を活かした疾患の治療・予防・健康管理の社会実装は、医療の個別化・精密化を飛躍的に発展させ、日々の診療を変えつつあります。一方で、遺伝医療・ゲノム医療に携わる私たちが本当に考えなければならないのは、ゲノム情報を得た後に、患者さんやご家族がどのように感じ、どのように意思決定し、どのように生きていくのか、そしてそれをどのように支えていくのかということです。このような思いを込め、今回の学術集会のテーマを「ゲノム情報のその先へ〜 Beyond genomic information, together」といたしました。

活発な議論と交流を生み出す場となることを願い、280題を超える

一般演題はすべてポスター発表とし、ファシリテーター主導によるポスターセッションを初の試みとして実施しました。2日間にわたり、各セッションでは有意義で熱のこもった議論が交わされたものと感じております。

一方で、プログラム進行がタイトであったことや、一部の講演会場では立ち見が出たことなど、運営面で参加者の皆さまにはご不便をおかけいたしました。至らぬ点につきまして、この場をお借りしてお詫び申し上げます。

多くの課題を残しつつも、新しい試みに取り組むことができた本学術集会が今後さらに発展していくことを祈念しつつ、次回会長である東京科学大学の有賀智之先生へとつないでまいりたいと思います。最後に、本学術集会にご参加、ご支援をいただいたすべての皆さまに、あらためて心より御礼申し上げます。



❖学術集会トピック&感想

▶遺伝医療領域

植野さやか

藤田医科大学医学部 先端ゲノム医療科

本学術集会では、2025年のシンポジウムに引き続き、着床前遺伝学的検査（PGT-M）をテーマにしたパネルディスカッションが行われました。直近1年でLi-Fraumeni症候群に対するPGT-M承認例が出るなど、遺伝性腫瘍症候群とPGT-Mの距離は急速に縮まっています。医療者の「いつ・どう伝えるか」、当事者の「子ども

にいつ・どう伝えるか」といった多角的な視点から議論が深められました。

最初にIVFなんばクリニックの小西先生からは、妊孕性温存を経験した乳癌患者への意識調査結果を発表いただきました。「子どもに同じ治療を経験させたくない」という願いの一方で、診断精度や倫理的ジレンマへの懸念が浮き彫りとなりました。また、長期間に及ぶがん治療と並行して、情報提供・意思決定を進める重要性が示されました。

FMC 東京クリニックの田村智英子先生は、諸外国と日本の状況を詳細に比較いただき、医療者・社会全体での認知度、遺伝に対する考え方などさまざまな違いがあるなかで、患者の選択肢を増やすために必要な支援のあり方を提言されました。

最後に、審査体制整備に携わる日本産科婦人科学会、申請や胚移植に携わる医師、がんの遺伝カウンセリングに携わる遺伝カウンセラー、RB（網膜芽細胞腫）ピアサポートの会の当事者（木瀬氏・野口氏）が参加し、現在の課題に対するディスカッションが行われました。学会からは、審査や議論を行う公的プラットフォームの設立、がんになる前からの社会への教育・啓蒙の取り組みが紹介されました。医療体制としては、相談窓口の見える化、実施施設の地域偏在解消が求められました。遺伝カウンセラーからは、個別の症例に応じた支援には主治医や他部門との連携、医療者の認知度向上が不可欠であることが挙げられました。当事者お二人からは、体験談とともに、子どもへ伝えるタイミングや将来への想いが語られました。

PGT-Mの対象となる「重篤性」の解釈は多様であり、一律の合意は容易ではありません。しかし、互いの立場を尊重しながら議論を重ねていく重要性を再認識する機会となりました。

▶乳腺領域

若狭紗央里 / 中津川智子

がん・感染症センター 都立駒込病院 外科（乳腺）

「BRCA 陽性」の先へ バリant情報を活用したリスク層別化と個別化診療

シンポジウム「HBOC Deep Dive 70 Minutes」では、HBOC 診療を *BRCA1/2* 病的バリantの有無のみで捉える従来の二分法から、個々のリスクに応じた層別化・個別化へ発展させるための考え方が多角的に議論されました。一般集団に対しては、polygenic risk score を用いて乳癌発症リスクを層別化し、サーベイランスの開始時期や方法、間隔を最適化する試みが紹介されました。とくに印象的であったのは、*BRCA1/2* を遺伝子単位で一括して評価するのではなく、バリantの種類（タンパク質切断型かミスセンス型か）、遺伝子内の位置や機能ドメイン、スプライシングへの影響を踏まえて発症リスクや予後を評価する視点でした。変異エクソンの位置によっても臨床的特徴や予後が異なる可能性が示されました。また、reduced penetrance pathogenic variant (RPPV) という概念も紹介され、同じ「病的バリant」であっても発症リスクは一樣ではないことが強調されました。本シンポジウムの内容は、筆者が取り組んでいる *BRCA1/2* バリantの位置・様式と表現型との関連を検討する研究とも重なるものであり、興味深く拝聴しました。将来的には、これらの情報をサーベイランスの強度、リスク低減手術の時期、薬物療法の選択に反映させることが期待されます。

▶消化管領域

高雄 美里

がん・感染症センター 都立駒込病院 大腸外科

消化管領域では多くの新知見が共有されました。家族性大腸腺腫症（FAP）への最新治療戦略や、MGPTによる大腸ポリポシ

スの診断と個別化マネジメントの重要性が示されました。Lynch 症候群に関しては、解釈が困難なバリantに対するRNA解析などの工夫を通じた診断精度の向上や、ユニバーサスクリーニング実装に向けた現状と課題などが共有されました。また、多診療科や地域との連携に焦点を当てた発表も相次ぎました。多臓器に病変が生じるCowden 症候群では、消化器科だけでなく泌尿器科や産婦人科など多診療科連携が不可欠であることが再確認され、小児期から始まる遺伝性腫瘍診療の議論や、奥川喜永先生の講演による「みなしコンパニオン診断」におけるがんゲノム医療中核拠点病院・拠点病院・連携病院と地域病院との連携の重要性など、幅広い世代や領域にわたる知見が示されました。

さらに、本学会設立の立役者であり初代理事長を務められた宇都宮譲二先生の追悼講演が行われました。宇都宮先生は、FAPに対する現在の国際的標準術式（大腸全摘・J型回腸囊肛門吻合）を考案されたほか、遺伝性腫瘍診療におけるデータ登録の重要性をいち早く提唱されるなど、大腸外科および遺伝性腫瘍の両領域に多大な功績を残された方です。富田尚裕先生や、かつて兵庫医科大学で宇都宮先生のもとへ留学して学ばれ、現在国際的に活躍されるGabriela Möslein先生からのご講演では、数々の写真を交えてその足跡が偲ばれ、宇都宮先生の偉大な功績と切り拓かれた精神が次世代へ確実に引き継がれていることに強い感慨を覚えました。

今回得られた最新の知見を日々の診療に生かすとともに、先人たちが築き上げてきた技術と遺伝性腫瘍診療への熱意を次世代へ受け継いでいけるよう、これからも研鑽を重ねていきたいと思います。

▶小児科領域

岡本健太郎

東京科学大学 総合外科学分野小児外科学

本学術集会の小児に関連するトピックスとして、シンポジウム4「小児期から始まる遺伝性腫瘍診療」がありました。小児遺伝性腫瘍のサーベイランスの重要性、Li-Fraumeni 症候群、多発性内分泌腫瘍症（MEN）、DICER1 症候群についての網羅的な発表をもとに活発な議論が交わされておりました。会場での参加者は200名を超え、大変盛況でした。

ポスターセッションにおいても、10歳代の遺伝性腫瘍の意思決定支援、家族性大腸腺腫症、子どもの遺伝学的検査受検についてなど、絶対数としては決して多くはありませんでしたが幅広く小児に関する発表を見受けられました。

来年2027年には、上司である有賀智之先生が学術集会長を務められます。小児分野のかかわりをさらに強く発展させていく予定です。キャッチフレーズは「生まれ、みんなの遺伝医療」です。専門診療科や専門職にとどまらず、患者さんや一般市民までを含めた「みんな」で進めていく遺伝医療でありたい。そのような思いが込められており、小児から成人までの「みんな」でもあります。

小児に関する遺伝性腫瘍分野はまだ未開拓の部分が多く、それだけに大きく羽ばたける余地があると思います。これからも日本遺伝性腫瘍学会の発展と共に小児のセッションが拡大し、関係者も増えていくことを望むと共に、微力ながら協力していきたいと思っています。

▶市民公開講座

「がんとともに しなやかに生きる力を支える」を終えて

吉村 章代

愛知県がんセンター 乳腺科部

市民公開講座「がんとともに しなやかに生きる力を支える一家族、仕事、お金、暮らしについて、いま知っておきたいこと」を開催し、約110名の皆様にご参加いただきました。会場は満席に近い盛況となり、参加者が熱心にメモを取りながら聴講される姿が印象的で、終始和やかな雰囲気の中で講座を終えることができました。

司会は当センターの室 圭先生と高磯伸枝先生が務め、私が遺伝性腫瘍、本多和典先生ががんの経済毒性、一般社団法人仕事と治療の両立支援ネット ブリッジの服部文先生が就労支援について講演しました。続くパネルディスカッションでは、「自分らしく生きる未来へのヒント」をテーマに活発な意見交換が行われました。

本講座では、治療や予防だけでなく、経済的負担、仕事との両立、家族とのかかわりなど、がんとともに生きるために大切な課題を多角的に考える機会となりました。医療の進歩により、がんとともに長く生きる時代だからこそ、一人ひとりが自分らしい人生を歩めるよう、医療と社会がともに支えていくことの重要性を改めて実感しました。本講座が、参加されたみなさまにとって、がんとともに生きることを前向きに考えるきっかけとなれば幸いです。



▶ミニシンポジウム 1

「MGPT を使いこなす診療へ、診療を変える MGPT へ」を聴講して

田辺 記子

埼玉医科大学総合医療センター ゲノム診療科

本シンポジウムでは、遺伝性腫瘍症候群診療における多遺伝子パネル検査（MGPT）の臨床実装と活用をテーマに、3名の先生方からご講演をいただきました。日常診療にMGPTをどのように位置づけ、患者・家族の診療に生かしていくかを考える貴重な機会となりました。

平田真先生からは、検査前後の説明にとどまらず、来談者の意向を踏まえたパネル選択、表現型・家族歴と結果の整合性の確認、さらに医学的管理までを見据えた運用体制の重要性が示されました。米国遺伝・ゲノム学会（ACMG）から今後発出予定の新たなバリエーション分類基準や、遺伝子バリエーションの機能的影響を実験的に評価したデータを集めた公開データベースである MaveDB の紹

介もあり、MGPT 時代のバリエーション評価について理解を深めることができました。

植木有紗先生からは、保険診療の BRCA1/2 検査と MGPT を院内で適切に併用する体制について、臨床実践データを交えてご紹介いただきました。検査件数やがん未発症者への実施が増加するなかで、診療科、遺伝医療部門、検査部門の連携とリコンタクト体制の整備が不可欠であることを改めて認識しました。

岩泉守哉先生からは、大腸ポリポース診療において、多数のポリプ発生を待つのではなく、10個以上の腺腫性ポリプや複数の過誤腫性ポリプを認めた段階で遺伝性腫瘍症候群を疑う重要性が示されました。MGPT 陰性であっても臨床所見に基づく管理や研究的解析を検討する姿勢が必要であると感じました。

3つの講演を通じ、MGPT は単に解析遺伝子数を増やす検査ではなく、診断、診療連携、患者・家族支援を発展させる基盤であることを実感しました。検査結果を臨床像と統合し、継続的な再評価と適切な医学的管理につなげる体制づくりが今後ますます重要になると考えます。最後に、先生方の貴重なご講演に感謝申し上げます。

▶パネルディスカッション 1

現場で語る、HTC のリアル

～はじめの一步とその先にあるもの～

井ノ口卓彦

がん・感染症センター 都立駒込病院 遺伝子診療科部

学術集会の初日、朝一番のセッションにもかかわらず、会場は多くの参加者で熱気に包まれていました。本パネルディスカッションでは、現役の遺伝性腫瘍コーディネーター（HTC）、コーディネーター資格取得を目指す医療従事者、協働する医師と認定遺伝カウンセラーが登壇し、終始和やかな雰囲気の中で活発な議論が交わされました。

パネリストらが語った HTC 取得の最大の魅力は、自身の専門性に「遺伝」というサブスペシャリティが加わる点にあります。例えば、がん専門看護師のスキルに遺伝の知識が合わさることで、患者へのケアの幅が広がり、他職種との深い連携が可能になった経験が紹介されました。また、他施設連携の際も HTC 同士のネットワークにより円滑に進んだということでした。さらに、医師、薬剤師、臨床検査技師など異なる背景を持つスペシャリストが「遺伝」という共通のテーマで議論を深めることで、多角的な視点を得られるだけでなく、互いに切磋琢磨できるかけがえのない仲間と出会える点も強調されました。一方で、今後の課題として、資格取得のハードルの高さや地域偏在（一部の都道府県における HTC の不在）、取得後のキャリアへの反映が十分に確立されていない現状が挙げられました。

ここ数年で遺伝医療は急速に日常診療へと浸透しており、求められる支援のあり方も日々変化しています。これからの HTC の未来像は、まさに現場の HTC 自身が築いていくものであると考えます。まずは、その先にある可能性を信じ、初めの一步を踏み出してみてはいかがでしょうか。

▶第 32 回日本遺伝性腫瘍学会学術集会において、優秀演題賞が発表されました

受賞された皆様を、以下のとおりご紹介いたします。
このたびのご受賞を心よりお祝い申し上げます。

No.	演題名		所属
1	50歳未満のBRCA1/2病的バリエーション保持者に対するリスク低減卵管卵巣切除術（RRSO）後のQOL変化—女性ヘルスケア介入の重要性—	尾身 牧子	がん研有明病院婦人科
2	がんゲノムプロファイリング検査で検出されるBRCA1/2 VUSの病理性再評価：real-world データとin silico 解析を用いた検討	新津 宏明	広島大学病院 遺伝子診療科
3	当院のBRACAnalysisにおけるVUS検出状況および再分類情報の管理に関する検討	久我亜沙美	公益財団法人がん研究会有明病院臨床遺伝医療部
4	Target adaptive sampling long-read sequencing (TAS-LRS) を用いたショートリードWGS解析における生殖細胞系列構造異常の検証	小田 智世	国立がん研究センター 中央病院臨床検査科
5	2度のBRACAnalysisで判定不能となりロングリードシーケンス解析でBRCA1遺伝子の構造変異を同定した若年乳癌の1例	横江 隆道	慶應義塾大学医学部乳腺外科
6	末梢血を用いた遺伝学的検査でLow allele fraction BRCA1病的バリエーションを検出した症例の多組織解析と遺伝カウンセリング	榊原 彩花	埼玉医科大学国際医療センター乳腺腫瘍科
7	遺伝性腫瘍関連遺伝子におけるクローン性造血の特徴	碓井 喜明	理化学研究所基盤技術開発研究チーム
8	10歳代の未発症者における遺伝性乳癌卵巣癌の血縁者診断と意思決定支援の経験	秋田由美子	愛知県がんセンター乳腺科
9	当院のLynch症候群症例におけるカスケードテスト実施に関わる因子の検討	浄住 佳美	静岡県立静岡がんセンターがん遺伝外来
10	通院距離およびサーベイランス施設変更が家族性大腸腺腫症患者のサーベイランス継続性と転帰に与える影響—多施設共同リアルワールドデータによる検証—	立田 協太	浜松医科大学
11	広範切除を回避し腹直筋後鞘温存とメッシュ再建を行ったFAP関連腹壁デスマイドの1例	長谷川 誠	福島県立医科大学消化管外科学講座
12	当院における造血器腫瘍遺伝子パネル検査と二次的所見への対応の実際	加藤 真吾	横浜市立大学附属病院がんゲノム診断科
13	遺伝性腫瘍症候群とPGT-M：当事者とその家族における認知とニーズ等のアンケート調査	新川 裕美	がん研究会有明病院臨床遺伝医療部

Topics

◆第 6 回トラベルグラント賞

本学会が扱う疾患の希少性・特殊性から、海外の研究者と交流を図ることが本学会の発展に重要と考えており、若手会員を対象に、遺伝性腫瘍に関連する国際学会での発表のための参加費（1 人 20 万円）を助成するトラベルグラント制度を設けております。第 6 回（2026 年）トラベルグラント賞を受賞されたのは右記の 2 名の先生でございます。

■受賞者

藤吉 健司 先生（久留米大学医学部 外科学講座）
二川 摩周 先生（岡山大学学術研究院医歯薬学域 臨床遺伝子医療学分野）

藤吉 健司先生より受賞後の学術集会への参加報告をいただきましたので掲載いたします。

▶トラベルグラント賞受賞報告

The Collaborative Group of the Americas on Inherited Gastrointestinal Cancer (CGA-IGC) 2025 に参加して

藤吉健司
久留米大学医学部 外科学講座

このたび、第6回トラベルグラント賞をいただく栄誉に預かり心より感謝申し上げます。この賞の助成により、私は 2025 年 10 月に米国ミズーリ州セントルイスで開催されました The Collaborative Group

of the Americas on Inherited Gastrointestinal Cancer (CGA-IGC) 2025 Annual Meeting に参加して参りました。本団体は、遺伝性消化器がんの基礎科学や臨床的なマネジメントの理解を深めることを目的として設立され、今回は設立 30 周年の記念大会にあたる節目でもありました。

消化器の遺伝性腫瘍に特化した団体ということもあり、会場では第一線で活躍される先生方から最先端の情報を学ぶことができました。とくに本大会では、Patrick M. Lynch 先生、John Burn 先生、Heather Hampel 先生をはじめ、この分野を切り拓いてこられた先

生方によるご講演を直接拝聴するという、またとない貴重な機会に恵まれました。これまでの遺伝性腫瘍研究が紡いできた歴史の重みとその最前線に身を置くことの責任の大きさを痛感し、身が引き締まる思いでした。

今回、私は「日本の地方におけるリンチ症候群のユニバーサルスクリーニングと遺伝学的検査の実態 (Universal Tumor Screening for Lynch Syndrome and Rate of Germline Genetic Testing in Japanese Countryside)」という演題でポスター発表を行う機会をいただきました。日本の地方における現状と当施設の取り組みを報告し、欧米の日常診療とのアプローチの違いについて、各国の先生方と大変有意義なディスカッションを交わすことができました。

ディスカッションや各セッションを通じて、米国における先進的な病院でのユニバーサル腫瘍スクリーニング (UTS) の現状を知ると同時に、医療保険の種類によって検査が実施できないケースがあると

いった格差も学びました。また、若年性がんや遺伝性腫瘍の患者に対する長期的なサーベイランスの経済的負担、それに伴う通院中断など、社会経済的な課題への注目が高まっている点は、今後の日本国内における診療体制や研究の推進を考えるうえでも大変参考になる知見でした。

国際学会への参加・発表は、日本における遺伝性腫瘍診療の現状を客観的にとらえ直す絶好の機会となり、臨床と研究に対するモチベーションがより一層高まることを実感いたしました。本大会でのディスカッションを通じて得た新たな着想と経験を糧に、今後も遺伝性腫瘍診療の発展と地域医療の充実に貢献できるよう、一層邁進していく所存です。

最後になりますが、このような素晴らしい賞を受賞させていただきまして、日本遺伝性腫瘍学会の諸先生方に心より御礼申し上げます。

開催報告

❖第4回 遺伝性腫瘍アドバンスセミナー 報告

遺伝性腫瘍セミナー委員会

委員長 中島 健

大阪国際がんセンター 遺伝子診療部 遺伝性腫瘍診療科

第4回遺伝性腫瘍アドバンスセミナーを2026年2月21日(土)に、相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明にて開催いたしました。

今回は、「遺伝性腫瘍診療のトピックス」をテーマとして開催いたしました。

MGPTに関する講義を吉田玲子先生、植木有紗先生に、CGP検査に関連する講義を桑田健先生、池上政周先生にお願いしました。VHLとHIF-2 α 阻害薬「ベルズチファン」の講義は中村英二郎先生にご担当いただきました。VHLに関しては、深堀りするために第29回の通常セミナーで取り上げる流れになっております。ヘムサイトの導入により広がりを見せる遺伝性造血器腫瘍に関して、今回も加藤元博先生にご担当いただきました。そして今回のセミナー

では初めてPGT-Mについて取り上げ、中岡義晴先生、倉橋浩樹先生にご担当いただきました。PGT-Mはまだ保険診療では実施できませんが、申請の現状や手技の内容について情報提供していただき認知が広がったことと思います。反響も大きな講義でした。

最終的な受講者数は、現地参加人数は70人、事後オンデマンド視聴を含めた総参加人数は344人でした。コロナ禍以降、現地参加人数は100人を下回ることが定着しましたが、事後のオンデマンド視聴を含めると多くの方に参加登録していただきました。引き続き、アドバンスセミナーでは通常セミナーから一歩踏み込んだ内容を取り扱っていききたいと思います。講義をご担当いただいた講師の皆様、委員会スタッフ先生の皆様、そしてご参加いただいた皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

活動報告

❖ Cowden 症候群部会

高山 哲治

徳島大学大学院 医歯薬学研究部

Cowden 症候群 / PTEN 過誤腫症候群 (PHTS) 部会は、私を含めて11名の部会員からなり、現在、本症候群の前向き登録コホート研究を進めています。本研究には全国27施設の病院が共同研究契約を結び、現在41名の患者さんが登録されています。

先日の第32回学術集会(名古屋)では、部会シンポジウム「日本初レジストリ研究が解き明かす Cowden 症候群 / PHTS: がん発症リスクと臨床管理」を開催させていただきました。司会を古畑智久先生と石川秀樹先生にお願いしました。まず初めに、私が「Cowden 症候群 / PTEN 過誤腫症候群 (PHTS) 前向き登録コホート研究の概要と現況」について説明し、その後、高島大典先生(四国が

んセンター)に乳癌、内野真也先生(野口病院)に甲状腺腫瘍、川口智之先生(徳島大学)に大腸癌や消化管病変、増田健太先生(慶應義塾大学)に子宮体がん、入部康弘先生(横浜市立大学)に腎細胞がんについてご講演をいただきました。会場は多数の参加者でほぼ満員となり、大変盛況な会となりました。あらためて、井本逸勢会長(愛知県がんセンター)をはじめ、本企画に携わっていただいた諸先生に厚く御礼を申し上げます。また、シンポジウム後、複数の先生から本研究に登録していただけたとの連絡を受け、現在共同研究契約の申請を行っているところです。ますます多くの登録をいただけることを期待しております。

なお、本部会では他にも、本症候群の全国疫学調査を厚生労働省消化管ポリポーシス難病班(坂本班)と共同で行っております。

◆新委員会設立のお知らせ

臨床委員会 遺伝性乳癌卵巣癌症候群（HBOC）委員会

担当理事 有賀智之

委員長 平沢 晃

このたび、臨床委員会 遺伝性乳癌卵巣癌症候群（HBOC）委員会を設立いたしました。

遺伝性腫瘍のなかでも HBOC は、Lynch 症候群と並んで頻度が高く、遺伝学的検査から病的バリエーション保持者へのリスク低減手術、サーベイランスまでが一連の体系として保険診療に組み込まれた、最も実装の進んだ領域です。しかし本学会には、Lynch 症候群委員会と対をなす常設の臨床委員会が存在せず、体制上の空白となっていました。折しも令和 8 年度診療報酬改定により、未発症の第 I 度近親者を含む遺伝学的検査やリスク低減手術等が新たに保険適用となり、HBOC 診療は「家系全体を見据えた医療」へと大きく

広がろうとしています。乳腺科・婦人科・泌尿器科・消化器科、そして遺伝子診療部門が交わるこの領域は、まさに本学会の学際性が最も輝く舞台です。

本委員会は、多遺伝子パネル検査（MGPT）の実装、BRCA1/2 にとどまらない広義の HBOC 関連遺伝子への対応、関連診療科・多職種・他委員会・関連学会との横断的な連携、そして患者・市民への普及啓発を柱に、HBOC 診療の質の向上と均てん化を推進してまいります。日本の HBOC 診療をこの学会から深く切り拓き、世界へ向けてリードしていく——その熱い志を胸に、委員一同、全力で歩んでまいります。皆様の温かいご支援とご参画を、心よりお願い申し上げます。

お知らせ

◆第 33 回日本遺伝性腫瘍学会学術集会 会告

■テーマ：集まれ、みんなの遺伝医療

■会 長：有賀智之（東京科学大学 総合外科）

■会 期：2027 年 6 月 18 日（金）～ 6 月 19 日（土）

■会 場：東京都・浜松町コンベンションホール

（東京都港区浜松町 2 丁目 3-1 日本生命浜松町クレアタワー 5 階・6 階）

■H P：https://www.c-linkage.co.jp/isht 2027/

◆第 29 回遺伝性腫瘍セミナー開催のお知らせ

このたび遺伝性腫瘍セミナー委員会では、「フォン・ヒッペル・リンドウ（VHL）病—VHL 病を題材に、遺伝性腫瘍のチーム医療の実践について考えよう!」をテーマに第 29 回遺伝性腫瘍セミナーを開催いたします。

■日 程：2026 年 9 月 17 日（木）11:00 ～（10:30 受付開始）、18 日（金）14:30 終了予定

（基礎編は 2026 年 9 月 16 日（水）午後からオンデマンド配信）

■会 場：国立がん研究センター研究所セミナールーム

（ライブ配信はありません。現地開催のあと、事後オンデマンド配信を予定しております。）※プログラム等詳細は、学会 HP をご覧ください。

第33回 日本遺伝性腫瘍学会学術集会
The 33rd Annual Meeting of the Japanese Society for Hereditary Tumors

集まれ、みんなの遺伝医療
Genetic medicine for all—uniting every profession

2027年6月18日（金）・19日（土）
浜松町コンベンションホール

会長 有賀 智之
東京科学大学大学院医学部総合研究科 総合外科学分野 教授

一般演題受付期間 2026年12月1日（火）正午～2027年1月7日（木）正午

主催事務局 東京科学大学大学院 医学部総合研究科 総合外科学講座
〒113-8510 東京都文京区湯島1-5-45
http://www.c-linkage.co.jp/jsh2027/

連絡事務局 (株)コンベンションリンクージ内
〒103-0075 東京都千代田区三番町2
TEL: 03-3263-8688 E-mail: jsh2027@c-linkage.co.jp

VHL 病は、泌尿器科、眼科、脳神経外科、脾臓・消化器領域、内分泌領域、放射線診断、遺伝医療など、多くの診療科・職種が連携し、生涯にわたって患者さんを診療していくことが重要な遺伝性腫瘍です。今回のセミナーでは、VHL 病のガイドライン・歴史、遺伝学的検査をはじめ、眼科、脳神経外科、泌尿器科、脾臓、褐色細胞腫、放射線診断、遺伝カウンセリングなど、VHL 病診療の各領域で国内の第一線で活躍されている専門家の先生方にご講演いただきます。

さらに、VHL 病当事者の方からのお話、京都大学医学部附属病院 VHL センターの活動報告、症例ディスカッションも予定しており、VHL 病を多診療科・多職種による「チーム医療」として考えるプログラムとなっています。それに加え、「診療報酬改訂に伴い変化する HBOC 診療」の講義を大野真司先生に、「遺伝性腫瘍症候群診療と保険診療にかかる現状と課題」の講義を平沢晃先生ご担当いただき、大変充実したプログラムになっています。

今回、木曜日・金曜日という平日の開催であることから、現地参加が難しい方も多いことと存じます。一方で、今回のセミナーほど VHL 病に関係する各診療領域の第一線の専門家が一堂に集まる機会は決して多くありません。ご多忙の折、また平日の開催ではございますが、遺伝性腫瘍診療に携わっている皆様には、可能な限り現地にお越しいただき、第一線の専門家との質疑・ディスカッションにぜひご参加いただきたいと考えております。

❖ Lynch Syndrome Forum 2026 開催のお知らせ

このたび、Lynch 症候群委員会主催による「Lynch Syndrome Forum 2026」を開催いたします。

- 日 時：2026 年 10 月 2 日（金）13 時 30 分より、
 ■場 所：京都大学 HORIBA シンポジウムホール
 （〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学国際科学イノベーション棟）
 ■テーマ：Lynch 症候群診療 Update

「がんゲノム医療時代におけるリンチ症候群研究会」の活動が本学会 Lynch 症候群委員会へ引き継がれ、2026 年 4 月より新たな活動を開始いたしました。本 Forum は、委員会発足後初めて開催する研究会となります。テーマを「Lynch 症候群診療 Update」とし、Lynch 症候群の診断、遺伝学的検査、サーベイランス、治療、遺伝カウンセリングなど、日常診療に直結する最新の知見や各施設での取り組みを共有し、今後の診療のあり方について議論する場になりたいと考えております。

特別講演では、理化学研究所・生命医科学研究センター副センター長の桃沢幸秀先生をお迎えし、「Lynch 症候群関連遺伝子に着目した 23 がん種横断大規模ゲノム解析」についてご講演いただ

きます。また、一般演題も広く募集しております。「Lynch 症候群診療 Update」に関連する演題はもちろん、症例報告、診療上の工夫、施設での取り組み、基礎・臨床研究など、Lynch 症候群に関する幅広いご発表を歓迎いたします。

本 Forum は Zoom を併用したハイブリッド開催ですが、ぜひ多くの学会員の皆様に京都の会場へお越しいただき、演者や参加者と直接意見を交わしていただきたいと考えております。日頃の診療で感じている疑問や課題を共有し、施設や診療科の垣根を越えて交流できることは、現地開催ならではの大きな魅力です。若手の先生方や遺伝医療に携わる多職種の皆様からのご発表も心よりお待ちしております。

一般演題の応募締切は 8 月 31 日（月）、参加申込締切は 9 月 17 日（木）正午です。皆様の積極的なご発表と、京都でのご参加を心よりお待ちしております。

Lynch Syndrome Forum 2026 当番世話人

中島 健

大阪国際がんセンター 遺伝子診療部・遺伝性腫瘍診療科／
大阪医科薬科大学医学部 臨床遺伝学研究室

❖学会ホームページのご紹介

当学会はホームページにて、会員の皆様をはじめ、遺伝性腫瘍の診療に携わる医療従事者、ならびに一般の皆様に向けて、本学会の学術活動、関連学会・研究会からのお知らせ、各種資格制度、遺伝性腫瘍に関する最新情報などを発信しています。

今回は、最近公開・更新された主なコンテンツをご紹介します。

▶ 遺伝とがんについて知ろう

厚生労働科学研究費補助金がん対策推進総合研究事業「ゲノム情報に応じたがん予防にかかる指針の策定と遺伝性腫瘍に関する医療・社会体制の整備および国民の理解と参画に関する研究」班（研究代表者：平沢 晃先生）により作成された「遺伝とがんについて知ろう」を、本学会ホームページからご覧いただけるようになりました。本サイトは一般の方を対象とした啓発コンテンツですが、遺伝性腫瘍や遺伝学的検査に関する情報がわかりやすく整理されており、医療従事者にとっても知識の確認や整理に役立つ内容となっています。また、患者さんやご家族への情報提供、遺伝カウンセリングの際の参考資料としてもご活用いただけます。

遺伝とがんについて知ろう

▶ 遺伝性腫瘍症候群関連ガイドラインリンク集

ガイドライン委員会との協働により、「遺伝性腫瘍症候群関連ガイドラインリンク集」を更新しました。遺伝性腫瘍症候群に関連する各種ガイドラインへアクセスしやすいよう情報を整理し、視覚的にも分かりやすい構成としています。日常診療や教育、情報収集の際に、ぜひご活用ください。

「遺伝とがんについて知ろう」および「遺伝性腫瘍症候群関連ガイドラインリンク集」については、医療従事者向けページと一般の方向けページの双方にバナーを掲載し、アクセスしやすくしています。

▶ 遺伝性腫瘍コーディネーター制度のご案内

ホームページには、遺伝性腫瘍コーディネーター制度を紹介するバナーも掲載しています。親しみやすいイラストとともに、制度の概要をご覧ください。

今後も、会員のみならずの診療、研究、教育活動に役立つ情報を、よりわかりやすくお届けしてまいります。新しい情報を随時掲載していますので、学会ホームページを定期的にご覧いただき、広くご活用いただけますと幸いです。

（広報委員会委員長 増田 健太）

編集後記

今回の Newsletter は、6月に名古屋で開催された第 32 回日本遺伝性腫瘍学会学術集会の報告を中心に構成しました。外気温の上昇に負けないほど、会場内では熱い議論や活発な情報・意見交換が行われていました。将来の遺伝性腫瘍診療・ゲノム医療のあり方を見据えながら、さまざまな領域・立場から日々の診療における課題や工夫に触れられる機会は大変貴重であり、最新のエビデンスについて学ぶことも大きな刺激となりました。

また、昨年より Newsletter では、学会の作業部会や委員会についてもご紹介いただいております。学会がどのような活動に取り組んでいるのかを広く知っていただけるよう、今後も内容を工夫していきたいと思っています。ご意見、ご感想や、今後取り上げてほしい話題などございましたら、ぜひ下記フォームよりお寄せいただけますと幸いです。

今号も Newsletter にご寄稿いただきましたみなさまに深く感謝申し上げます。

(編集委員：金子景香、田代真理、宮脇聡子)

[Newsletter ご意見フォーム]

<https://forms.gle/omrBZkzgSQgfGfHGA>

締切の目安：10 月末日

